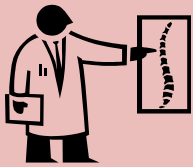


伊藤外科ニュース



104号

2013.03 発行

3月9日は気温が20度以上になりました。土曜日の午後なので、往診の前に自転車で中央公園に行きました。

早咲きの高遠の桜は、まさに開花寸前の様子で、日向ぼっこをしている人たちの様子もウキウキし春爛漫までもう少しです。

花粉症のおはなし

今回は、皆さんを悩ませている花粉症について少々。

アレルギー性鼻炎のうち花粉の飛び交う春先のものを花粉症と呼びます。私自身の花粉症は約20年前に突然発症しました。日本人の約40%がアレルギー性鼻炎を患っているようです。クシャミ、鼻水、鼻つまりが花粉症の代表的な症状です。その他、目のかゆみ、咽頭痛、重症例では発熱などの症状も出現し日常生活に支障をきたします。



花粉症は、花粉に対するアレルギー反応によって起きる病気ですので、治療の第一は花粉の被曝を極力避ける事です。特に、花粉症の新人さんたちは着衣にたくさん花粉を付けて鼻を真っ赤にして来院されますので要注意です。

内服薬は抗ヒスタミン剤を主体に処方いたします。その他点眼薬、点鼻薬を症状によって使い分けて行きます。特に点鼻薬は一日1回のものが主流となり便利になりました。今年は春一番が吹いた時期から患者さんが急増しました。私も、診察中に何度もクシャミをして皆さんにご迷惑をお掛けしています。あと数週間の辛抱ですね。

さて、いよいよ慢性胃炎に対してのピロリ菌除菌療法が健康保険適応になりました。

消化器を担当する医師の間では、胃の粘膜にいるピロリ菌が日本人の胃がん発症の要因と認識されていましたが、なかなか治療の認可が下りませんでした。

除菌のために抗生剤を多量に使うので、耐性菌や安全性の問題、医療費の問題などがある事と私は理解しています。いずれにしても、内視鏡で慢性胃炎を確認したうえで内服薬による治療となります。治療を希望される方はご相談ください。

以前にも書いたように、私は春が一番好きです。そして桜の花が大好きです。

もうじき染井吉野も開花し、毎日の通勤がまた楽しい時期となります。特に長く寒かった今年の冬の後では、尚更です。満開の時期に雨が降らないように期待しています。皆さんも花見を楽しんでください。



伊藤外科 HP <http://www11.ocn.ne.jp/~itoh-hp>

(バックナンバーは HP にて公開中です)

三弓先生の本棚 30



雑誌『致知』

雑誌が売れないという話が聞かれるようになって久しい。出版の世界で仕事をさせてもらっているのだから、今でも書店に並び続けている雑誌を見ると、「がんばってるなあ〜」と愛おしい想いにもなったりする。

かつては多くの人に「毎号買っている」雑誌があった。雑誌の作り手たちも、読者層がかぶる競合他誌を意識していたものだが、現在、意識すべきは雑誌ではない。スマートフォンやモバイル、ゲームといったツール。24時間しかない1日の間、かつては読書に使われていた時間はデジタルツールにすっかり取って代わられてしまった感がある。

三弓もずいぶん長いこと、愛読している雑誌があった。週刊誌では『週刊文春』と『週刊新潮』。木曜日発売のこの二誌を、なぜか水曜日の夕方に店頭で並べる本屋が十二社にあつたらしく、毎週水曜日は最新号を手を帰宅していた。私も『週刊文春』の連載「家の履歴書」がお気に入りだったが、三弓の「最近、二誌ともつまらなくなった」のひと言で、ぶつぷりと水曜日の定期便はなくなった。

その後もずーっと読み続けていたのは、月刊誌の『文藝春秋』と『致知』である。

『致知』（致知出版社刊）は書店では販売していない。定期購読のみの雑誌である。なので、名前を聞いたことがない方もいらっしゃるだろう。実は私も、三弓が健在のときは、『文藝春秋』は借りても、『致知』には見向きもしなかった。

この雑誌のキャッチコピーは「人間学を学ぶ月刊誌」。読者対象年齢としては中高年のようで、「修身」や「一念、道を拓く」「大人の幸福論」「知命、立命」など、毎号ワンテーマを掲げて特集を組んでいる。ちなみに雑誌タイトルの「致知」とは、中国古典の言葉で、「人間本来の英知を明らかにし、現代人に欠ける“知行合一”の精神をいう」のだそう。

実はこの雑誌を、一年間、定期購読してみた。きっかけは、昭和一桁生まれのお茶飲み話相手（三弓のことだが）がおいとましてしまったから。いい・わるいといったことは置いておくとして、戦前教育で初期の人格形成をした世代は、私のように戦後の高度経済成長期に育った人間にはない、なにかがあったように思う。尋常小学校で「子曰わく」と論語を暗礁させられたかどうかは聞きそびれたが、「仁・義・礼・孝・忠」といった儒家思想を、かろうじて己の血肉にできた世代でもあるだろう。

言葉を「知っている」と「（腹で）わかっている」とは別のことである。そんなことが、おぼろげながら見えてきた今、三弓が愛読していた雑誌を読んでもみようと思った。

イデオロギーに少々偏りのある発言の記事もなくはないが、「日本の文化」をこれからのテーマの根底に据えていきたいと考えている昨今、他誌ではなかなか読めない年配者の声も多く掲載されている。